

「半農半陶」を楽しむ

青 木 勝 美

卒業後はリース会社などでサラリーマン。四十代半ばの神戸支店勤務時代、旅行先の岡山で「備前焼」の陶工、榎原先生と知り合ったのが転機となった。先生との出会いで「備前焼」に惹かれた。その後、親しくお付き合いした縁で、陶芸の世界に飛び込んだ。

「会社が定年になったら陶芸を始めようか」と当初は思っていた。運良く現在の住まい、店舗が見つかった。予定を早めて平成十一年六月、五十四歳で会社を早期退職。「東京生まれ」の妻と、三人いる娘のうち農業志望の二女と三人で岡山に移り住んだ。

今はわたしたち夫婦と娘夫婦の四人で備前焼の制作・販売と、田畑を耕して米や野菜をつくる、いわば「半農半陶」の生活を送っている。

備前焼は須恵器の流れを受け継いだ上薬を使わない「無釉」の焼締陶。備前焼は「土」が命とされる。備前市伊部一带には、適した「土」がある。

備前市は牛馬の神様を祭り、地元で「牛神（うしがみ）さま」と呼ばれる「田倉牛神社」で知られる。店舗はそ

の参道にあり、「牛馬像」を中心に、十二支、縁起物、花器、食器などを作つて、販売している。

学生時代はもう遠い昔になるが、備前市に住んだ翌年、中大時代の仲間が遠路駆けつけ、ここでクラス会を開いてくれた。会場は、わたしの陶芸の師、榎原先生が昭和五十七年に開村した備前焼工房の「和意谷（わいだに）陶芸村」。先生手作りの備前焼の「露天風呂」につかり、おいしい料理を囲んで学生時代に戻ったような楽しいひと時を過ごした。

こうして瀬戸内の温暖な気候の中で自然豊かな暮らしを楽しみながら、人生の転機を与えてくれた人との出会いに感謝する日々を過ごしている。

(岡山県備前市)



「吉田のうどん」

大 坂 吉 之

ゴールデンウィークが終わり、五月半ば過ぎの甲府盆地は夏のたすまゝいとなる。四方を囲む山々は一気に緑を増す。一年を通じて一番いい季節だ。かつて甲府に二年勤務した。

山梨では甲府盆地を「国中（くになか）」、富士山ろく周辺を「郡内（ぐんない）」と呼ぶ。甲府盆地からの富士山は美しい。そのふもと、郡内の富士吉田市によく出かけた。



「吉田のうどん」と呼ばれるうまい「うどん」があるからだ。実にうまい。店は市内に六十軒以上あるらしいが、どこもうまい。あの「讃岐」なんて目じやない（ファンの方すみません）。全国的にあまり知られていないのが、不思議なくらいだ。

手打ちの麺はコシがある。熱いのも冷たいのもどっちもいい。いつも丼を二つ並べて食べた。つゆのベースは何かわからないが、具にはゆでたキャベツを使う。これにてんぷらやキンピラ、山菜を乗せて食べる。唐辛子とゴマ、山椒を練り合わせた「すりダネ」と呼ぶ独特の薬味が味を引き立てる。一杯三百円程度からと安い。店はどこもふつうの民家風。客は靴を脱いで座敷に上がる。テーブルの空いた席に勝手に座って食べる。どの店も味は期待を裏切らない。遠方からの客を何回か案内したが、だれもが満足して帰っていった。

ものの評価は食べ物なら「うまい安い」が最高。「高いうまい」は当たり前で、「まずい安い」は我慢できても、「高いまずい」はもう論外だ。

この地方、古くは織物の一大産地。うどんは機屋（はたや）の経営者が従業員に「手早くできて満腹になり、安上がり」の食事として出したのが始まりとか。

土地の食文化を知り、味わうのも転勤の楽しみである。（東京都多摩市）

「田舎暮らし」の所感

川 原 脩

わたしの退職後は、田舎暮らしで無農薬・有機栽培の野菜作りで「晴耕雨読」の生活と決めています。しかし、田舎には不動産屋さんがなく、土地や住まいを探すのも、容易ではありませんでした。平成十六年、杵築市に現在の住居を確保し、その生活を歩み始めたところです。

当地は大分県・国東半島の付け根の瀬戸内海西部に位置する。東側は瀬戸内海を臨み、緑の山々に囲まれた地。稲作のほか、かんきつ類やシタケ、野菜が豊富に作られており、「山の幸、畑の幸、海の幸」に恵まれています。

ここも多分に漏れず、少子高齢化と過疎化が極端に進み、荒れ果てた田畑、手入れのできない山林が多数あります。

農業は、「生命総合産業・農村はその創造の現場」といわれるながら、教育・防衛・年金とともに、戦後六十年間、実質的的根本的解決がなされなかった問題でしょうか。現状は国民の食料の四〇％しか確保できないのが実情です。

「農業汚染による生命の危険」「食品汚染が人類を襲う」「累積被害による遺伝子のへの影響」がいわれてきました。しかし、安い輸入品の増加と「値段と外見、見栄えのよさ」を望む消費者の希求で、（農家は）農業だけで生計が立たないばかりか、後継者難にも見舞われています。

僅かばかりの農地を借りて、自分が食べる野菜・果物を作るだけでも、台風や大雨洪水、干害、害虫、病気に襲われ、見栄えのいい野菜ができるのはごく少量です。

しかし「無農薬・有機栽培で新鮮。ほんものの美味さ、高い栄養価」があり、自分が丹精込めて作った野菜だから我が家の食卓を賑わせるのでしょうか。（大分県杵築市）



「県庁三十七年」にピリオド

斎 藤 雅 俊

神奈川県立産業技術短期大学校を最後に三月末で神奈川県庁での三十七年間にピリオドを打った。思えば、仕事をいろいろ経験し、楽しく幸せな県庁勤務だった。多くの素晴らしい人たちと出会い、支えられて、ここまでの人生の半分以上の間、勤務できた。退職を前にした三月、勤務先の短大関係者など総勢十一人で北京を旅行した（もちろん自腹）。

短大の仕事で関係のあった企業のトップのお世話で、見学先などをセッティングしていただいた。この方は、中国で技術専門学校の設立に尽力し、「井戸を掘った人」として功績を評価されている。その方は、こちらの旅行の意を「研修的旅行」と理解され、技術短大や職業訓練校、外国資本出資の建設機械工場、現地資本の部品工場などまじめな視